



玉田 薫

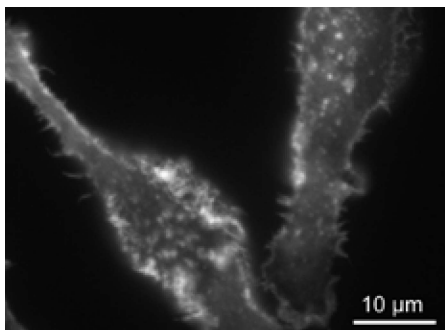
専門分野：表面科学、ナノサイエンス

同じ場所に留まっていると、やりたいことをやり終えないうちに人生が終わってしまうから。「これで先が見えた」というところでエッセンスだけを手の中に残し、残りは一度深く捨てて全く別のものに取り掛かる。そしていずれそれらを縦横無尽に組み合わせ、新しいものを生み出すチャンスを待つ。常に自分の知らないことに挑戦しつつ独自の何かを探していくのが自分のスタイル。

途中で専門を変えると研究キャリアとして損をするとか、評価が下がるとか、そういうことを気にしたことはない。研究だけに限らず他の仕事でも新しいことに挑戦する時はトップギアで走れるのでとても楽しい。今一番興味があるのはベンチャー設立。一度もやったことがないのがその理由。

教員も研究者も「トビタテ」

ダイバーシティに期待するのは、個々の違いを認めるだけではなくその違いを活かす発想。



世界最薄：細胞接着ナノ界面の可視化

均一な組織は脆いもの。女性や外国人を組織の中に入れて表面的にプラスのイメージを演出するのではなく、個々の個性を戦略的に使って柔軟で強靱な九州大学を作り上げてほしい。

また九大の若手研究者にはぜひ若いうちに海外で学ぶ機会を持ってほしい。多様性に関する感性を磨くとともに、女性のリーダーシップのあり方についても学べるはず。文化も言語も違う新しい環境に身を置き無我夢中で頑張る時間の中で、人間として、研究者として、ひとまわり大きく成長できるはず。

略歴

奈良女子大学 理学部化学科卒業後、日本合成ゴムに入社。ウイスコンシン大学を経て、奈良女子大学で博士号取得。理化学研究所、工業技術院物質工学工業技術研究所、マックスプランク高分子研究所、シンガポール国立大学、産業技術総合研究所、東京工業大学、東北大学などを経て、2011年から九州大学先端物質化学研究所教授。2017年から同大学副理事。日本学術会議連携会員。

以上、インタビューの一部を紹介しました。企業や海外で得た経験のお話など、全体については男女共同参画推進室のホームページからご覧いただけます。

境界領域研究の魅力

私の研究するナノサイエンスは、化学や物理、生物といった既存の学問領域ではくくりきれない境界領域と呼ばれる分野。すでに確立された学問分野よりも、教科書がない境界領域に魅力を感じる。

他の人と違ったことがしたいので、同じ分野の研究者が周りにいなくとも不安に思ったことはないし、自分は「誰もいなくてよかった」と考えるタイプ。前例がないところで自分の目を頼りに、技術・知識を積み上げていく。そう簡単に新しい「発見」があるわけではないが、予想外のことが起きないかと思って常に研究をしている。

捨てるために手に入れる

まずは1つのことをとことんやる。研究はある程度の深さまでやらないと本質が理解できず、学んだことにならない。やるときは集中し、その時の自分の能力で行けるところまで行く。ただし同じ場所にあまり長くは留まらない。